

布団は「角」が命。 布団の知識と技能を持った集団

四角い布団が庶民に使われ出したのは江戸時代

布団には掛け布団と敷き布団があるのが当たり前と思われていますが、もともとは掛け布団というものはありませんでした。畳やゴザの上で、昼間着ていた着物を被って寝ていました。やがて綿の入った着物を寝る時に被るようになります。それが夜着^{よぎ}あるいは襦袍^{じうぼう}と呼ばれました。現在の掛け布団は、いわば丹前が進化したものです。一般庶民が四角い布団を使い出したのは江戸時代後期からのようです。

布団の中に詰められる綿はもめん綿でしたが、昭和30年代の終わり頃からナイロン綿が使われ出し、50年代からは羽毛布団が使われるようになってきました。いずれももめん綿に比べ軽いという特徴を持っています。羽毛を使った布団は高級品で、欧米では一般的に使われているといったイメージがありますが、実際はかなり違うようです。平成17年に愛知万博が開かれたとき、愛知県寝具技能士会が外国のパビリオンを廻り、それぞれの国ではどんな寝具を使用しているか調査したところ、羽毛布団や毛布、羊毛、化学繊維などいろいろな布団を使っていることがわかりました。



ヨーロッパで増えている FUTON の愛好者

愛知県寝具技能士会は国家検定資格である技能士を持つ人と目指す布団屋さんの集まりです。ただし、現状では会員全てが技能士の資格を取得しています。

もめん綿の布団は使っているうちにペチャンコになり、綿ホコリが



出るのは確かです。しかし、ペチャンコになるのは寝ている間にかく汗を吸い取ってくれるからです。日に干すことでふっくらとします。そればかりか布団綿を打ち直すことで、新品に近い状態に戻すことができます。こうしたリサイクルは羽毛や化学繊維では困難です。また、きちんと仕上げられた布団からはそれほど綿ホコリが出ることもありません。

布団は角が命といわれ、仕立のいい布団は綿が均一で角まできちんと綿が入っています。愛知県寝具技能士会では布団を長く使ってもらえるように、販売した布団には製造年月日と綿の打ち直し時期を明

記したラベルを取り付けています。

最近ではヨーロッパでも「FUTON」という言葉で日本の布団を愛好する人が増えているそうです。

DATA ■愛知県寝具技能士会
所在地：中区正木一丁目13-14
・昭和50年：愛知県寝具技能士会設立